

慧能禅師(えのうぜんじ)

令和2年7月第4週放送

お釈迦様から数えて三十三代目、中国では禅を伝えた達磨大師から数えて六代目にあたり、曹洞宗の系譜に連なる方が慧能禅師です。中国で唐の時代、七世紀半ばから八世紀初めに活躍されました。現在の^{かんとうしやう}広東省にお生まれになりましたが、三歳で父親を亡くし、母親との厳しい生活を余儀なくされたといひます。

ある日、町に薪を売りに行ったところ、^{こんごうきやう}『金剛経』を唱える人物と出会い、その方から現在の^{こほくしやうおうばいけん}湖北省^{こうにんぜんじ}黄梅県にいる弘忍禅師の存在を聞き、入門を志願してその下を訪れました。当時の中国では南の地方はおくれた地であるという風潮があり、慧能禅師は弘忍禅師に南から来たといひ追いつかれそうになるものの、人に備わるとされる仏性には南北の違いはありませんと答え、^{うす}碓^{てらおとこ}を踏む寺男として留まることを許されます。しかしこの問答を通じて、弘忍禅師も一目置く存在となりました。

時は流れ、弘忍禅師は世代交代を考える頃となり、修行僧たちに自分の^{きやうがい}境涯を詩にしたためて提出するようにと呼びかけました。すると当時、修行僧の第一座と誰もが認めていた^{じんしやう}神秀が「我が身は菩提の樹であり、我が心は何でも映し出す鏡と同じ。常にそれらを清め、^{ちり}塵^{ほこり}や埃を取り除き続けることだ。」という詩をまず提出しました。それを見た慧能は「菩提の樹である我が身も、澄んだ鏡である我が心も実体のあるものではなく、全てはもともと変わらぬ存在ではない。有るという

『 禅のこころ -曹洞宗- 』

塵も埃も妄想に過ぎない。」と、神秀の詩を喝破するかのような詩を提出しました。その結果、五祖弘忍禅師は慧能を自分の後継者、六祖慧能禅師として認めたとはいえられています。但しその継承による混乱を案じて、暫くの間身を隠すようにと慧能禅師は諭されたのでした。

それから十年余り経ち、『涅槃経』^{ねはんきょう}を講ずる印宗法師^{いんしゅうほうし}の下に慧能禅師は一聴講者としていました。ある日、寺の外にたなびく幡^{はた}を前に二人の僧侶が「これは幡が動いているのだ。」いや「これは風が動いているのだ。」と論争していた折、「それはあなたたちの心が動いているのだ。」と慧能禅師は答えました。その話を聞き及んだ印宗法師に見出され、禅の継承者として六祖慧能禅師がここに登場したのです。以後広く教えを説き、その教えは『六祖壇経』^{ろくそだんきょう}として現代に伝えられています。そして慧能禅師は、生まれ故郷に近い広東省韶関^{かんとんしょうしょうかん}の地に曹溪山宝林寺^{そうけいざんほうりんじ}を再興し、戒と坐禅をもとにした修行を生涯七十六歳まで続けたのでした。

禅の世界に身を投じて以来、人の持つ仏性の可能性を信じ続け、それを働き出させるべく邁進した偉大な禅の祖師、それが六祖慧能禅師なのです。

— 終 —